

稱讃二五二号

二〇一三年十一月一日発行

発行 浄土真宗本願寺派 稱讃寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

HP shousanji.com

二〇一三年度 稱讃寺門信徒会費

年会費 六千円

振込先 城北信用金庫 一ツ家支店

名義 浄土真宗本願寺派 稱讃寺教会

代表 北村 信也

口座 普通 6176051

※ゆうちょ銀行の場合は、最終ページをご参照ください。

「やるべき業縁ごうえんのもよほせき、いかなるふるまひもすべし」とこそ、聖人しょうにんは仰せ候おほ そつらひしに、当時とうじは後世者ごせしやぶりして、よからんものばかり念仏申すべきやうに、あるいは道場どうじやうにはりぶみをして、なんなんのこしららんものをば、道場どうじやうへ入るべからずなどといふこと、ひとへに賢善精進けんぜんしやうじんの相そうを外にしめして、内うちには虚仮こけをいだけるものか。願がんにほこりてつくらん罪つみも、宿業しゆがいのもよほすゆゑなり。されば善きよことも悪あしきことも業報ごうほうにさしまかせて、ひとへに本願ほんがんをたのみまゐらすればこそ他力たうりきにては候へ。



二〇一三年十一月二十七日撮影

『歎異抄』十三条より

「道場にはりぶみをして、なんなんのこしららんものをば、道場に入るべからず」ということを、当時のお他宗の権威あるお寺のことで、例えば、「女人禁制」や「酒厳禁」や罪を犯した者の立ち入りを禁止した札のことかと勘違いしておりました。読み返すと、その前に、「善人のみが念仏すべきで、非常識なこと、悪いことをした者は、聴聞してはならないという浄土真宗のお寺のことを指していたと気づかされました。蓮如上人の頃の「領解文」の発言は、少し違和感を持ちながらも、伝統だと割り切っていたところがありました。現代人に分かり易くということ、「私たちのちかい」や「新しい領解文」を唱えることを推奨されるようになりました。その伝えようとされるのが、素直に受け取れない私は「阿弥陀さまのお心に触れたら、善人になれる」と言われているようで、でなければ、「何を聞いてきたか、浄土真宗の信者ではない」と聞き取ってしまいました。それとも、「おまえこそ、善人面していないか」と問うておられるのでしょうか。「業」に囚われているのは、私なのでしょうが。

稱讃寺 報恩講

親鸞聖人のご往生(新暦一月十六日・旧暦十一月二十七日)を期に、営まれ続けられてきたご法要です。

第三代ご門主の覚如上人が著された『報恩講式』に、親鸞聖人の恩徳を三つ揚げておられ、その二番目に「本願相応の徳を嘆ずる」とあります。

それは、親鸞聖人は、どういう方であろうと、快く受け入れられ、阿弥陀さまの「どの方も隔てることなく、必ず仏にいたします」との誓願が成就した証として顕わしてくださった「南無阿弥陀仏」の「報恩のお念仏」を十方の全ての諸仏方が「南無阿弥陀仏」と称讃(第十七願)することで、私たちに届けてくださっていることをお示しく下さいました。

まさに、そのことが、「本願に相応」していることであります。自分の愚かさに気づかされること、ご本願に遇っていることであり、慚愧と感謝のお念仏となっているのであります。また、親鸞聖人は常に私どもに、疑う者も必ず信をとり、謗る者も遂にはごころ(情)を翻すとおっしゃっておられます。正に、仏さまのお心(意)と同じでありました。

私のごころは、何処までも「我執」であり、疑い、謗るごころであるかもしれないが、「南無阿弥陀仏」のお念仏に出遇っていることを、この報恩講で一緒に見つめて参りましょう

日時 十二月十七日(日)正午

日程

一二:〇〇 受付

一二:三〇 御齋

一三:〇〇 おつとめ

『正信偈』(行譜・六首引き)

一三:四五 休憩

一四:〇〇 法話 住職

「報恩のお念仏」

一五:〇〇 茶話会

一六:〇〇 恩徳讃

『御伝鈔』拝読について

報恩講の前日、十二月十六日(土)は、通常は「のんのん法話会」の日であります。ふと思いい立ちまして、『御伝鈔』を拝読してみることになりました。これから練習をいたしますが、つつかえ、つつかえになり、耳障りで、親鸞聖人の尊さ、ありがたさが、伝わらないかもしれないかもしれませんが、お時間をごさいましたら、ちよつと覗いてみてください。



日時 十二月十六日(土)午後五時

※稱讃寺カメラでも覗けます。

携帯アプリの取得方法は、稱讃寺ホームページをご覧ください。

(HP shousanji.com)

※写真は鹿児島別院の報恩講での『御伝鈔』拝読です。私ではありません。

『親鸞の宿業観 歎異抄十三条を読む』

廣瀬 果師

一九九三年初版

宿業の課題

宿業の問題点

第十三条の本文に入るに先立って、いくつかの問題点を挙げてお話ししていこうと思います。まず第一は、宿業ということです。みなさんがたは、宿業ということばを聞いて、なにをお感じになるでしょうか。

このごろはだんだん聞かないようになってきましたけれども、それでもまだなんか不幸に出会いますと、「前世の種まきが悪かったのですかね」ということを言うでしょう。しかしみなさん、前世に種をまいたことを覚えておられますか。ですから、前世の種まきが悪かったと言われる人に、前世にどんな種をまいてきたか説明してくれと言ったら、説明もなにもできるものではないでしょう。しかし、やはりそういうことばで宿業という教えが伝わっていることはまちがいないのです。やはり「前世の種まきが悪かったからいまこういう報いを受けるようになったのですね。だからあきらめなければいけなかったがありませんね」という部分がある

大きいのではないのでしょうか。

あるいは自分自身の反省を人に語るとき、「私は業の深い人間でして」、こうおっしゃるかたがおられます。ところが、業が深いとはいったいどういうことですかと逆に私が聞き直しますと、「いや、それはようわからんけれど、なんやしらんが業が深いような感じがするようになに教えられるべきか」ということになっているのではないのでしょうか。

そんなことばを拾い出すときりがないのですけれども、極端なことになりますと、中風になつたり、心筋梗塞で倒れたようなときにも、「こんな業病にかかりまして」、こう言われるお年寄りがよくおられます。どうして中風は業病で、風邪は業病と違うのでしょうか。考えてみるとやはりおかしいでしょう。おかしいと思うのが普通で、そう思うのが健康なのではないでしょうか。中風は動けないから業病で、風邪は万病のもとだとは言うものの、ウィルスの感染で大したことはなく、すこし暖かくして卵酒でも飲んでいれば治るから業病ではないということなのではないでしょうか。

一事が万事というていいほど、業とか宿業ということばは曖昧な使われ方をされることばです。しかしそれによって自分で自分を説得しなくてはいけないというような感覚が、あまりにも長く続きすぎたのではないかという気がします。浄土真宗の教えを、ほんとうにお聞きになっているかた、徹底して聞き込んでおいでになるかたは、明るいのです。その人の生活、そ

の人の起居が軽やかです。蓮如上人の『蓮如上人御一代聞書』三二三の中に「世間・仏法、ともに、人は、かろがろとしたるが、よき」ということばがあります。仏法も、世間のいろいろなことについても、重たい気持ちで、額に縦じわ寄せているのはいいのではない。仏法も世間のことも、みなかろがろとした心でうなずいていくのがいちばんいいことだというふうな蓮如上人は言われているのです。そのように「かろがろとしたるが、よき」と蓮如上人は言われているますけれども、実際には、なんかお寺へ来る人は暗いですね。暗いというか、なんかもうひとつ晴れない顔をしている。もう一歩突っ込んで申しますと、あまり晴れやかな顔をしているとまずいのではないかという感じを持っておられるのではないかとさえ思えるくらいです。

ある人がこんなことを言われました。その人は、「私が酒を飲んで歌を歌うのは、酒が歌を歌うので、私が歌を歌うのではありません」と言い訳しなければならぬほどよく酒を飲んで、歌を歌って歩く人なのです。ところがあるとき、こういうことを私に言ったことがある。

「お寺参りしているときには暗い顔している人が、うちの店へ来てくれると、えらい明るい顔をして、酒を飲んで、陽気に歌を歌っておつて、あれどうなっておるの？ しゃらか。お寺というところは人助けるところでしゃらか。助けるところへ行つて、暗い顔してきて、こういうところへ来て明るい顔している。あれどうなっておるの？ しゃら。さかさまと違いますか」

と言いました。

お寺へ行ったり、あるいは仏法を聞くということを通して、その人がもともと持っている暗いものがどこか薄紙をはぐようにはがていつてその人の心の中に明るいもの、そして温かいものがたまたまというのが救いということでしょう。ところが救いといっても、人間が暗くなることだとすれば、これは救われないほうがいいのではないのでしょうか。

ということは、暗くなるというのはやはり救いではないということでしょう。普通暗くなると縁あって出会っても、その出会ったことをほんとうに泣きながらも、泣いている涙それ自体にどこやら明るさがある、そんなことをはつきりしていかなければいけないでしょう。親鸞聖人は、当時の社会にあって最底辺に生きる人たちと生活をともにして、ほんとうに死ぬか生きるかの毎日を送られました。『歎異抄』に「うみかわに、あみをひき、つりをして、世をわたるもの」と言われていますけれども、ほんとうに板子一枚下は地獄という生活をしている人たちとともに生きられたのです。板子一枚下は地獄というのは、漁師にとつてはあたりまえだとおっしゃるかもしれませんが、親鸞聖人がこういうことをおっしゃるとききの板子一枚下は地獄というのは、ほんとうに地獄なのです。

「漁師殺すに刃物は要らん、しけの三日も来ればいい」といいますが、漁師の命を断つには

刃物は要らない。いまから七百年前に越後、関東で漁師をしている人たちにとっていったいどんな生活があったのかと申しますと、しけの三日も四日も続くようなときには、しけが続くから船は出せないといって安閑としているわけにはいかなかったのでしょうか。自分と自分の家族みんなが食べていかななくてはならないのですから、しけの中でも九死に一生を得ることができるかできないか保障がなくても、家族が飢え死にしていまいますから、船出していかななくてはならなかった。大黒柱の御主人を見送る家族が、「お父さん、きょうはこんなお天気だから、もう船を出すのをやめてくれ」と、ようとめなかっただろうと思います。死ぬか生きるかわからないことを承知で漁に出ていっても、うらわないと、一家心中しなければならぬという状態を生きていたと思います。毎日そんな生活でしたら、その人たちが暗い顔をしていてあたりまえだと思えます。その人たちをより暗い心、暗い顔にしていくのであったならば、救いどころでなくて、ただでさえすくいから遠いと思われる生活をしている人たちを、もうひとつ輪を掛けて苦しめていくことになるでしょう。

ところが親鸞聖人は、はつきり、

五濁悪世の有情の 選択本願信すれば

不可称不可説不可思議の

功德は行者の身にみえり

とおっしゃっておられます。五濁悪世のただ中に生きている生きとし生けるものが、選択本願、阿弥陀の本願を信ずる身になると、不可

称不可説不可思議という功德が、その信ずる行者の生活に満ち満ちてくると言い切っておられます。もしそれが暗い顔をするということだということならば、親鸞聖人は大うそつきになります。だとすると、その当時そういう生活をしている人たちが、その生活の在り方を変えられないことはできなかったかもわかりませんけれども、そういう生活の中でたくましく生き切っていくという底力を一人一人がきちつと心の中に持ち、それを体で表現できるような、力強い人生を生きる人間に、その人たち一人一人がなつたに違いない。そうでなければ、「功德は行者の身にみえり」ということが、親鸞聖人のはつたりとなつてしまいます。

はつたりではないということから『歎異抄』の編者は「念仏者は、無碍の一道だと言いつたのでしよう。あのことばの背後には、『歎異抄』を書いた一人の人ではなくて、たくさんの漁師とか商人とか農民とか、そういう人たちがいて、その人たちが「ああ、そうだ、そうだ」と言っている声が聞えるような気がするのです。「念仏者は、無碍の一道だ」というひと言は、念仏申す身になることによつて、さわりのない一道を生き抜いていく人間になれるという親鸞聖人の教えを伝えてくれています。そしてそういうことばにはやはり親鸞聖人の教えを聞いて、「ああ、そうだ」とうなずいて生き抜いた人たちが何百人、何千人といったに違いな。そうするとその人たちは、けつして暗い顔をしていたはずはないと私は思うのです。

そういう意味で、浄土真宗のお救いということが宿業ということを中心としながら、人間にかかわって二つの面でかなり人間の救いの内容を過たせてきたのではないかという気がしてならないのです。それはひと言で申しますと、いま生きている現世は宿業の報いであり、宿世の業の報いだから、しかたがないとあきらめて生きていくべきである。そのあきらめて生きていくことの中でお念仏を申していくことによって、やがて命終わって、お浄土へ生れることができる。こういうことでいちばん大事なこの世がおるすになってしまったのではないのでしょうか。だいたい過去、現在、未来の三世と申し増すけれども、私たちは三世ということの持つて

やはり仏法というのは、はつきり申しておきまされども、特に親鸞聖人の教えというものは、道理、法則にかなわないことはひと言もおっしゃっていない。これだけはきちつと腹の中に収めておいていただきたいのです。

三世が実際に私たちにわかるのはいつですか。過去でしょうか。過去といっても、生れてきてから後、きのうとか一年前のような過去はわかりますよ。しかし生れてくる前の過去はわかりますか。これはわからないのがあたりまえであって、わかるほうがおかしいと思います。そうすると生まれてくる前の過去がわかるというようなこと、あたかもそれがほんとうであるかのように主張されてくるということが、現在に影をさすことになるのです。わからないものがいま生きている事実

若くして住職になられたかたが、住職披露の法要のときにあいさつを兼ねて御門徒の人たちにお話をするということになった。その若住職というのは仏法をきちつと聞いておられた人だったので、「うちの若きん、こんど御院さんになったけれども、どんな話をしてくれるか」と、御門徒の人たちは楽しみにして期待していたわけだ。そうしたら、パッパツと出ていって、頭を下げて、「犬が西向きや尾は東。おしまい」と言

残酷なもの言い方になるかもしれませんが、ひとときまのことを例にして話しますと、かつて差し障りがあるかもしれないし、感情を逆なでするということになるかもしれないから、自分のことを例に出して言います。私は、父親が一歳で死にまして、母親と別れたのが十三歳です。兄弟もいたのだそうですけれども、結局全部死んでしましまして、私は一時期まさに天涯孤独という状況を生きていました。そんなとき、自分と同じ十三歳ぐらいの子どもが、両親に手を引いてもらったり、あるいは両親といっしょにどこかへ行く様子を見たりしますと、やはりうらやましい思いがしました。そのうらやましいと感じた思いというのは、案外大人になっても消えないものです。そして自分の不幸の理由をみなそっちへ押し付けて、親

は当然であって、どうしてもそうなります。これは未来はわかりますか。あしたのことともわからない人間は、死んでからのことがわかりますか。わかる道理がないでしょう。そうすると

あれはいったいなんの話やということになったそうですけれども、あとからよく考えてみると、そういうふうな道理しか親鸞聖人はおっしゃらないということなのだ、あとからだんだんわかってきたということだ。犬が西向いて、尾も西向いているというよう

あはれは、ほんとうに危険なのです。はつきりいまして、その一点を過ちますと、宗教はないほうがいい。しかしほんとうのことが明らかにさ

し、ひとときまのことを例にして話しますと、かつて差し障りがあるかもしれないし、感情を逆なでするということになるかもしれないから、自分のことを例に出して言います。私は、父親が一歳で死にまして、母親と別れたのが十三歳です。兄弟もいたのだそうですけれども、結局全部死んでしましまして、私は一時期まさに天涯孤独という状況を生きていました。そんなとき、自分と同じ十三歳ぐらいの子どもが、両親に手を引いてもらったり、あるいは両親といっしょにどこかへ行く様子を見たりしますと、やはりうらやましい思いがしました。そのうらやましいと感じた思いというのは、案外大人になっても消えないものです。そして自分の不幸の理由をみなそっちへ押し付けて、親

がないのでこうなっているのだと考えてしま
うということがあります。そしてさらにもう一
つは、親をもういつぱん取り戻せるような形
で、救いというものが自分のうえに成り立つて
こないものかなという夢のような期待を持つ
ものです。そういう期待に対して、「その救いは
ありますよ、それはこういうものですよ」とい
うふうにかかわってくるのが、宗教という名で
呼ばれているものにはずいぶんあるようです。

そのように道理に反するようなことが、宗教
という名の救いの内容としてわれわれに語ら
れてくることが多いのです。それに対して親鸞
聖人の教えは、たとえどんな表現で語ってお
いになっても、道理にかなわないものは救いの
内容とはならないということを明らかにして
おられます。救いの内容となるものは道理にか
なっているものであって、それ以外はなんにも
救いの内容とはならないというのが親鸞聖人
の浄土真宗なのです。それが浄土真宗である
にもかかわらず、浄土真宗の中の一つのかなめ
といつてもいい宿業という教えが、実は親鸞聖
人の道理にかなった了解とは違うところで受
け止められているのではないでしょう。

昔私らの子どものころ、見せ物というのがあ
りました。村の小さな鎮守さまのお祭りなん
かに見せ物小屋というのがよくかかったもので
す。私の記憶にも残っているのですから、私ら
以前の時代を生きた人たちにとっては、そうい
う見せ物というのは一年の中の一限りの行
事として待遠しい、楽しみ事であったのかもし

れません。その見せ物の中で、私の記憶に残っ
ているものは、顔は完全に大人ですけれども、
体は完全に子どもというのがあります。あるい
は両手両足のない人が芸をするというののもあ
りました。

そしてそのときの口上というのはだいたい決
まり文句がありまして、「親の因果が子に報
い」ということになっていました。私は、そんな
ことにまで浄土真宗の教えが影響していると
はよう言い切れません。言い切りませんけれど
も、浄土真宗の宿業の教えがそのあたりにまで
影響を及ぼしていたのではないかという感じが
ぬぐえないのです。ところが、顔は完全に大人
だけれども、体は子どもであるというのは、実
は造られた人間なのです。子どもをさうって
いつて、鑄型にはめて育てれば、体は大きな
うに人工的に、人間の手を加えて身体障がい
者を造っていったわけです。そしてそれを見せ
物にしてお金を取っていたのです。

あるいは両手両足のない女性に芸をさせる
というの、両手両足を切つて、そして芸をさ
せたのです。

そんなことできるかとおっしゃいますか。おつ
しやるかおつしやらないかしりませんけれど
も、できるかというふうにお考えになるのだつ
たら、いちばんわかりやすい、わかりやすい、こ
れも困るのですけれども、中国では美人、昔で
すよ。現在の革命後の中国ではありませんよ。
それ以前の中国、それ以前の中国では足の小

さいのが美人とされていました。纏足といっ
て、だから小さい子どものころから大きい靴を
履かせないで、小さい靴を履かせていたので
す。したがって大人になっても足だけは子ども
の大ききしかない。だからまともに歩けない。
そういうことができたのですから、それはいま
言っただるま娘を造るぐらいのことは、そんな
困難なことではありません。そしていまのよう
な体が小さくて、顔だけが大人だという人間
を造ることもできたはずです。このように全部
人工的に身体障がい者を造ってきたのです。そ
の人間の力で不幸へ落とし込まれた人たちは、
普通の人のたちの前へ見せ物として出していた。
ところが、そのときの口上というのは、「親の因
果が子に報い」ということになっていたのです。
このように、人間が造つたものであつても「親
の因果が子に報い」というように、個人の宿業
の問題にしまつていけるのです。

※「だるま娘」とか不適切な表現があります
が、原本のまま掲載しておりますことをお許
しく下さい。

※「宿業で区別している面もある。あなたはあ
なたであつて他人でないのは、宿業でしょう。
業とは、区別する面と通ずる面とがある。通
じなければ他人と言えぬ。他人と言えぬのは
通じているから、他人と関係があるのは宿業
が通じておるからです。」

親鸞聖人御誕生八五〇年・立教開宗八〇〇年記念
★前進座特別公演

渡辺 善則作
河原崎 國太郎・川名 あき 演出

花こぶし

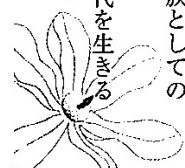
親鸞聖人と恵信尼さま



平安末期から鎌倉時代へ…。世の中は天災・飢饉・疫病の上に戦乱が続き、末法思想に覆われていました。法然上人と共に、救いを求めるすべての人々を救わんと「南無阿弥陀仏」のお念仏を広めた親鸞聖人。そして、親鸞聖人と堅い絆で結ばれた、妻・恵信尼は、親鸞聖人を支え、伴走した、自立した一人の人間として、その波乱万丈の生涯を送られました。

一九二一年に発見された、末娘・覚信尼と交わした十通の手紙「恵信尼消息」を頼りに、妻・恵信尼の視点で、夫として家族としての親鸞聖人の姿を描きます。

そして、戦争や気候危機・格差社会など、混迷する現代を生きる私たちに、その先を照らす、「希望」をお届けいたします。



鑑賞ご希望の方は、同封の申込用紙に記載して12月20日までに稱讃寺にご連絡ください。（12月17日報恩講参拝時でも構いません）

○一等席（9,000円→8,000円）のみの取り扱いとなります。

○団体で申し込みます。観劇日 1月29日（月）午後の部14：30を申し込みます。もし満席の場合は、1月31日（水）午後の部14：30を申し込みます。

○チケット代金は、予約が取れ次第、あらためてご案内いたします。

○観劇出来なくなった場合は、公演10日前まではキャンセル料は掛かりません。

ものがたり

建仁元（一一〇）年、比叡山で修行する若き僧・恵信（のちに親鸞の妻となる恵信）のお二人の出会いから物語は始まります。

やがて六角堂で親鸞菩薩の夢のお告げを得た恵信は、法然上人を訪ね、共にお念仏を広める道を歩み始めます。僧として初めて結婚し、より深く力強く歩みを進めた親鸞聖人ですが、時の権力者から弾圧を受け、越後へと流罪に…。

越後でもお念仏を広め続けた親鸞聖人と恵信尼は、罪が赦された後は関東へ移り、稲田の里（茨城）を拠点に約二十年の間、民百姓の中で救いの道を説かれます。時には近在の家族のもめごとを持ち込まれ、また時には、筑波山の山伏から立ち退きを迫られ…。やがて次第に、多くの人々にお念仏は広まっていききました。

いったん京都の都へと戻られたお二人でしたが、病に臥せる故郷の長女を支えるために、恵信尼は越後へと向かい、夫婦別れ別れになります…。

東京公演 浅草公会堂

2024年 令和6年 1月29日（月）・30日（火）・31日（水）

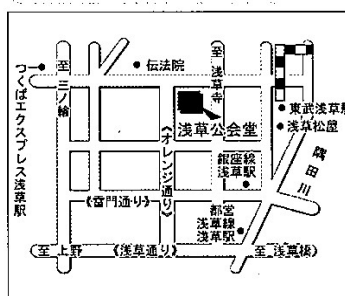
公演スケジュール 開場は開演の30分前になります。

2024年	1/29（月）	1/30（火）	1/31（水）
午前の部		11:00	11:00
午後の部	14:30	14:30	14:30

水戸公演 2月1日（木）

詳細は前進座までお問い合わせ下さい。

会場へのアクセス



台東区立浅草公会堂
〒111-0032
東京都台東区浅草1-38-6
TEL: 03-3844-7491

アクセス

地下鉄
銀座線 浅草線1番・3番出口 徒歩5分
都営浅草線 浅草駅A4出口 徒歩7分
私鉄
東武鉄道浅草駅 北口 徒歩5分
つくばエクスプレス 浅草駅A1出口 徒歩3分

ご観劇料金（全席指定・税込）

一等席（1・2階席）…… 9,000円	チケット一般発売開始 12月7日（木）10時より
二等席（3階席前方）…… 5,000円	● 前進座 チケット専用 0422-49-0300
三等席（3階席後方）…… 3,500円	● 前進座 ウェブサイト ほか

ご寺院特別料金 一等席 8,000円

- ご寺院特別料金の取り扱いは各宗派にお問い合わせ下さい。
- 二等席・三等席にご寺院特別料金・先行受付のご用意はありません。
- 二等席・三等席は前進座のみの取り扱いです。

お問い合わせ

前進座 0422-49-2811（平日10時～17時／土日祝休み）

稱讃寺一二月行事予定

六日(水) のんのん法話会 休座

一六日(土) 「御伝鈔」拝読 午後五時

一七日(日) 報恩講 正午より

日程

一〇〇〇 受付

一一〇〇 御齋

一二〇〇 おつとめ 『正信偈』行讃 六首引き

一三四五 休憩

一四〇〇 法話 住職 「報恩のお念仏」

一五〇〇 茶話会

一六〇〇 恩徳讃

一九日(金) 十一月五日(金)

鹿児島に帰省中のため、お寺を留守いたします。

ことし
今年も 終った

また 生きてきた

二〇二三年「心のともしび」十二月カレンダーより

親鸞聖人御誕生850年

築地本願寺

立教開宗800年

慶讃法要

ご懇志のご進納を賜っておりますこと厚くお礼申し上げます。

9月23日の秋季彼岸会法要までを期限としておりましたが、12月17日の報恩講までと延長させていただきたいと思ひます。

来年の4月の慶讃法要のご縁にご一緒にお遇いしたく存じます。

何卒、ご協力賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

①城北信用金庫一ツ家支店

名義 浄土真宗本願寺派

稱讃寺教会 代表 北村信也

口座番号 普通 6176051

②ゆうちょ銀行店名四四八

名義 キタムラ シンヤ

口座番号 普通 2374851

③ゆうちょ銀行電信振替

受取人口座番号14430- -23748511

おなまえ 北村信也(キタムラ シンヤ)

編集後記(愚案)

み仏にいだかれて

きみ往きぬ 慈悲の国
み救いを 身にかけて

示します 畏さよ

この間テレビを見ておりましたら、市川市の市街地に竹林があり、そこに入ったら、災難に遭うという噂があり、街の人々に、そんな話を知っているか聞いたところ、街の人々は殆どの方が知っていて、真顔で、昔は竹林の奥に池があつたそうで、林に入つていった人が戻つてこなかったと話され、祟りだと信じているような印象を受けました。現在の竹林は、うっそうと竹が茂っていますが、そんなに広くなく、周りが柵で囲まれ、鳥居が建っており、林の中には入れないようになっていました。

神社の関係者に真相を尋ねたところ、神社にとって、竹林は神聖な場所だということで、立ち入らないようにするため、災難が起こる等の噂を流したと言うことのように思えた。

科学が発達した現代でも、祟りとか信じてしまうのですね。噂の元を辿れば、目には見えないものへの畏敬の念が前提になっているようです。

しかし、祟りを恐れての「畏敬の念」は、本来とは違ふのかも知れません。

二〇二三年度 遺骨一時お預かり費

管理費 五千元

永代使用積立金 五千元から

振込先 城北信用金庫 一ツ家支店

名義 浄土真宗本願寺派 稱讃寺教会

代表 北村 信也

口座 普通 6176051

または

振込先 ゆうちょ銀行

店名 四四八(ヨシヨシハチ)店

名義 キタムラ シンヤ

口座 普通 2374851

門信徒会費 6千元 お預かり管理費 5千元 永代使用積立金 5千元から